

鉄道を御嵩へ…

●困難を極めた鉄道建設

期待を背に第一期工事として取りかかった「多治見—広見」間の約11.8キロは、物価の高騰や資金不足などによって当初の計画を縮小し、線路幅をせまく、枕木を短く、そして橋を鉄から木材へと変更しましたが、機関車や貨車・客車の購入も困難な状況にあり、さらに資金を追加して集めました。

そして、大正7年(1918)12月なんとか完成を迎え、ついに営業を開始しました。「御嵩に鉄道を…」との願いが叶ったまさに第一歩でした。

●広見—御嵩間の完成と買収

「多治見—広見」間の完成に続いて、「広見—御嵩」間(現在の御嵩口駅)の延長工事にも取りかかり、大正9年(1920)8月には全線開通、念願の多治見—御嵩間での営業が開始されました。

しかし5トンもある機関車は、峠道にさしかかるとガタンゴトンと音がするだけで立ち往生し、乗客が「皆で押してやれ!」と機関車を押して、なんとか峠を越えたというエピソードも残っています。

このような出来事から「東濃鉄道の機関車は、ふるしきに包んでさげられる」とイヤミを言われたのだそうです…。

そして、「多治見—御嵩」間の全線開通からわずか8年後の大正15年(1926)、中央本線連絡強化の目的から、「美濃太田—多治見」間に鉄道の建設が決まったことを受け、東濃鉄道の広見—多治見間は、国に65万円余りで買収されることになり、「太多線」へと生まれ変わりました。



煙をあげて走る東濃鉄道の機関車(大正末期ころ)